

教師の教育実践に関する社会学的研究

—感情労働の視点から—

森 翔平

第 1 章 感情労働としての教師

本研究の目的は、感情労働 (emotional labor) の視点から教師の教育実践における生徒への振る舞いや働きかけを明らかにすると同時に、それらがどのように教職アイデンティティへとつながっているのかを示すことにある。

第 1 章では、まず感情労働概念を概観し、本論文が扱う感情労働概念の「範囲」を提示した。その上で、これまでの教師に関わる感情労働の先行研究を検討し、本研究の位置付けを行った。

第 2 章 授業場面での感情労働

第 2 章では、授業場面における教師の感情労働の振る舞いやその働きかけをみていった。特に第 1 節で〈教師-生徒〉という枠組みの中で生徒に「寄り添う」態度がみられ、《同質な者》としての感情マネジメントがうかがえた。他方で、〈教師-生徒〉という枠組みそのものが揺らぎ、授業空間の秩序を大きく逸脱するようにみえた授業場面では「長期的な見通し」を教師が認識することで、ネガティブな感情労働がポジティブな感情労働に転化している様子が示された。

第 3 章 学校行事での感情労働

第 3 章では、日々の学校生活から離れた学校行事の中で、教師は生徒にどのような振る舞いや働きかけを行うのかを検討していった。そこでは、「心から」の〈ノリ〉を求めようとする点で感情労働—感情規則や感情の操作—だといえるが、しかしながら、教師は学校行事という性格上の「盛り上がり」や〈ノリ〉を戦略的・戦術的に行っていくのであった。こうした学校行事における教師の感情労働のそれは「自主・自立を促す」という中学校特有の様式に合致させるかたちで促されていくことが確認された。

第4章 教職アイデンティティに潜む感情労働

第4章においては、感情労働という視角から教職に付随するアイデンティティ、すなわち教職アイデンティティに着目することで、実際の教職のやりがいや達成感、充足感の源流を探求した。その結果、次のことが明らかとなった。第一に、教師の日々の教育実践と活動は感情労働を伴うものであるが、それが返って自身の「教職アイデンティティ」の確保・維持に寄与していたことである。第二に、そうした「教職アイデンティティ」の確保・維持は教員文化に内在するものとして位置付けられ、教員文化を支えるメカニズムの一つであったということである。

その内容は、授業場面の中における〈教師-生徒〉間での相互交渉—やりとりやコミュニケーション—の過程ではその「距離感」を示す言動から〈教職アイデンティティ〉の確保と維持が示された。また、このような授業場面での交渉のもとで、教師は特定の生徒への教育的配慮—「苦手な子」に対しての「選択」と「集中」—を試みる。こうした教育実践は学力保障などといった観点からその教育的価値を見いだすことができることから、教師へのやりがいや達成感の獲得、すなわち教職アイデンティティの確保・維持がみられたのである。他方で、学校行事の場面に目を転じてみると、学校行事が持つ特有の性格から、教師の感情労働における要請が変容する姿を確認することができた。学校行事の場では、教師の感情労働のその振る舞いや働きかけは質的な変化を伴い、そうした感情労働の要請を用いていくことで生徒との関係を維持したり、学校空間や学級のコントロールを試みたりする。こうした達成が見込まれたとき、教師は大きなやりがいや充足感を感じることができるため、自身の教職アイデンティティの確保と維持が見いだされるのである。こうした教師の感情労働における振る舞いやその働きかけは戦略的・戦術的に意図して行われていくものであると同時に、それが教職アイデンティティを確保していることが示された。このような教師の感情労働(およびその要請)は第2章以降からみてきたように、ポジティブな側面を含みながら、それが自己像の確保と保護にも繋がっている。

第5章 本稿の総括

教師は、複雑なワーク(仕事)を通して自己像(教職アイデンティティ)が成り立っていることが明らかとなり、「教職アイデンティティの複雑性」が示された。こうした教師の諸実践は、教師一人ひとりによる創意工夫から成り立っているものであり、同時に教職アイデンティティを獲得するための技法にもなっている。

本稿の知見は、こうした授業や学校行事の場面という限定性を有するものの、「ハレ」の場(学校行事)と「ケ」の場(学校生活)での往復活動をうまく用いることによって感情労働が肯定的に達成されていることや、これらが教職アイデンティティの確保・維持に寄与していたこと、さらには、この教職アイデンティティの複雑性が明らかとなり、教師が学校生活上で抱える様々な感情の対処戦略をいか

2020 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

に維持しているのか、またその達成感や充足感をどのように満たすことができるのか、その振る舞いや働きかけを理解するための一つの視座となるだろう。